

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University merge to Osaka Metropolitan University

Title	(第9章)シャバダバの会・シャバダバ研修会を終えての感想
Author	山田 真紀子, 小川 多雅之, 當 洋彰, 岡田 雅恵, 三浦 紀夫, 市川 俊美
Citation	URP「先端的都市研究」シリーズ. 18巻, p.83-86.
Published	2020-03-15
ISBN	978-4-904010-33-4
Type	Book Part
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学都市研究プラザ
Description	刑務所出所者等の意思決定・意思表示の難しさと当事者の声にもとづく支援
DOI	10.24544/ocu.20200615-008

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

第9章

シャバダバの会・シャバダバ研修会を終えての感想

山田真紀子・小川多雅之・當洋彰・岡田雅恵・三浦紀夫・市川俊美

1 シャバダバ研修会に参加して

研修会のチラシを作るにあたり”元受刑者“と表示することについて、当事者に配慮する気持ちと、他方で一般に伝わる言葉がいいかと、いろいろ迷って当事者に聞いたところ、元受刑者であったことは消せない過去であり、これだから大事だから気にしないときっぱり言われ、スティグマを意識しすぎていたのは私の方だと改めて気づかされた。また、自らの経験談を大勢の前で語ることが、精神的負担になるのではないかと危惧していたが、広い会場のステージで、堂々とマイクで話している姿を見て、これもまた、更生の道を歩み始めていることに遅れをとっていたのは私だったと気づかされた。研修会参加者の顔は、当事者の話にうなずきながら聞く人や優しい視線で笑っている人、時に顔をゆがめている人など、参加者からのリアクションがまた、当事者にとっては、社会の一員であると認められていることを実感してもらえたと思う。

(山田真紀子)

2 フラットな関係で語る「場」

過去の受刑体験を語るのは、一般的に憚られるかられることだろうと思う。やんちゃをした過去を武勇伝のように語る感覚とは一線を画して、『シャバダバの会』には、まじめ且つ穏やかな雰囲気があった。

役を経験したことの無い私たちが、当事者の方々の話を聞かされた時に「へえ！」とか「知らなかった！」と反応するのを見て、当事者の方々は自身の体験談が新鮮さ驚きを与える、価値のある情報であることを実感したのか、回を重

ねるごとに当事者の方々の発言は積極的になっていった。

日ごろ支援者として接している私たちには「教えてもらう場」となり、当事者間では「経験を共有する場」になっていたと思う。うまく言葉にできないが、こういう「場」こそ、「元受刑者」というスティグマを過去のものにするプロセスとして必要なのではないかと感じた。

(小川多雅之)

3 シャバダバの会に参加して

途中から参加したが、前回のたこ焼き交流会で当事者の方々は顔合わせをしていた事と、今回の題目が「刑務所あるある」だったので当事者から活発な意見が飛び交っていた。普段の生活の中で、刑務所の話などできないが、当事者同士なので意見が飛び交ったのではないか。また自身の意見に同調する事で発言をしやすい環境だったように思えた。

今回当事者で一名の方を3回程送迎で関わった。当事者の方に何故今回参加しようと思ったのかと聞いてみた。当事者の方は、「自分の経験した事を興味のある方に聞いて欲しい。そして、刑務所がどういった場所なのか知って欲しい。自分も人の為に役立ちたい。」と言っていた。当事者のこの言葉を聞いた時に、生きていく上で、やりがいや生きがいが必要と改めて感じさせられた。そしてシャバダバの研修会後の送迎の時に、当事者より「この会がすごく良かった。当事者同士でお話ができ、みんなで発表する事ができて楽しかった。またこのような発表の場所はないのかな～」と話されていた。この方にとって、このシャバダバの会が生きがいに感じていたのかな～と思えた。

(當洋彰)

4 たこ焼き交流会にて

時間前に会場へ来られていた当事者の方々は、同行した施設の方、または支援者と所在なく待たれていて、到着した担当相談員の顔を見るとホッとされた

のか、その傍に行き、笑顔に向けて話される。オリエンテーションが始まり、たこ焼き交流会の趣旨などを聞かれている時の皆さんはかなり緊張気味。自己紹介では、当事者の方がそれぞれ“呼んでもらいたい名前”を発表。下の名前や、少しもじった名前など皆それぞれ。

交流会が始まり、担当相談員ごとに分かれてタコ焼き器を囲む。「たこ焼きを焼いたことがない」「大勢でパーティーをしたのは初めて」という声が聞こえる。初めのうちは、相談員が当事者に話しかけながら一人でたこ焼き器に具材を入れていたが、たこ焼きが焼けだし、くるりと一つ二つひっくり返すのを見ているうちに、それまでじっと見ていた当事者の方々も我もとひっくり返します。はじめは上手いかなかった返しも、回を重ねるごとに上手くなっていく。そうしていくうちに、相談員や支援者と一緒に具材を入れながら、なんとなく役割分担的なものも出来てきて、お互いの話をポツリポツリと語りながら笑顔でたこ焼きをつついている。どこか仲間的（家族的）な雰囲気が漂い込んでいる。各テーブルを回ると、同じ具材を使っているはずなのに皆個性的なたこ焼きになっているのが不思議。そして、どのテーブルも自分のところのたこ焼きが一番おいしいと笑顔で差し出してくれる。

交流会が終わり、大人数でのパーティーにお疲れの様子も見られたが、見知らぬもの同士から少し距離が縮まったか緊張感は和らいでいる。それぞれ今回の感想を述べられる中で、どの方もこれまでの人生でこのような会に参加した経験がないことを語られ、この場に参加できたこと、担当者・支援者への感謝を口にされた。今後もこのような何気ないほっこり会を催すことができればと思う。

（岡田雅恵）

5 感想

登壇してくださった皆さんが、とても協力的だったことが強く印象に残りました。私は日常的に元受刑者の福祉的支援に関わっていますが、なかなか刑務所の中のことを尋ねることはないのです、とても勉強になりました。今後の支援の参考になります。仮説的に思っていた「刑務所の中では、舐められてはいけ

ない」という心理が働くことについて、その通りだったと実証できた気持ちがしました。彼らにとっては、一般社会が日常なのか、あるいは一般社会の方が「仮の場所」なのか、どちらかわからないのではという気がしました。また機会があれば、別のメンバーに集まってもらってシャバダバの会が実施できればいいなあと思います。

(三浦紀夫)

6 感想

私は保護観察官として罪を犯した人たちの社会復帰にかかわっていますが、景気が満期となったのちはかかわることができません。その後を知ることになるのは不幸にして再び失敗してしまった方たちについてのみです。

20年以上保護観察官として勤務していますが、出所した方たちのその後について生の声を聞いたのは初めてです。これまで必要だと思って関わっていたこと、助言したことが役に立ったのか、大きなお世話だったんじゃないかと、気になることがありました。

この日、皆さんの笑顔を見たとき、「支援はありがたかった。」との言葉を聞かせてもらったとき、関わりは間違っていなかったんだと嬉しく思いました。

残念ながら社会に居場所を見るることができず、刑務所に戻ってしまう人もいます。しかしひとりでも多くの人に笑顔で生活できる居場所がみつかるよう、これからも頑張ろうと思えた1日でした。よい機会を与えていただき、本当にありがとうございました。

(市川俊美)